「黒ダイヤに輝く炭都」を表看板に、三池炭鉱は日産二万トン祝賀パレードを行なった。しかし、職場では二万トン体制確立のため、職制支配を強化し、法を無視したあくどい手段で合理化攻撃をかけ、いっさいのしわよせを労働者におしつけている。

二万トン体制確保の合理化

文句言えば解雇

山

昨年八月、港沖竪坑移行につながる五二〇米坑道移行前は、採炭切羽が三払であったのが、人員はそのままで移行後は四払にふえている。そのため払採炭工は極度の労働強化で、部内移転とともなう実働時間の延長とともに、標準作業量引き上げ（賃金切り下げ）となっている。

弁当はにぎりめし

四山鉱では日産四千トンから、現在三月平均六千七百トンに引き上げたため、石炭運搬の電車は二四時間フル運転で、七分おきに通っている。しかしその掘り出した石炭を三川大斜坑へ送り出すチップラ操作作業に従事する運搬工は三名（第二組合員）。そのため弁当はにぎりめしにするよう職制より指示があったとか。弁当箱では両手を使うため食べている間一人が作業できないので、片手で食えるにぎりめしにさせている。また電車の運転をする運搬工も、にぎりめしに切りかえつつある。そして運転をしながらごはんを食べている。

まさに囚人労働にも等しい労働強化ではないか。

機械に追われる人間

四山ではホーベル採炭である。スイッチ一つで動く機械には常席係員がつきっきりで操作を行なっている。その採炭を行なった後、坑道に水圧鉄柱を立てる仕繰の作業に人間は追いまわされ、しかも一班が三名でやる仕繰作業に、第二組合員は二名にへらされている。人命を無視して作りあげつつある二万トン体制も、けっして労働者にはしあわせをもたらさない。

われわれは、政府の石炭政策によって体制的合理化を遂行しようとする三井鉱山に対決し、斗う以外にない。

宮浦

ボタが多い

宮浦でも出炭増強のためにはあらゆる手段をとっている。

小切羽をふやして、採炭をすすめるため間接夫を応援させているので、採掘後の保安作業が遅れる。その上会社は坑道整備ということで、採炭以外の職種の者にも道中のコボレ炭や盤打ちをさせて石炭を積み出させている。そのため選炭場ではボタが多いといわれている。また平常日の整備作業のおくれを取りもどすため、三交替の一部の者には公休出勤が強要されている。

公傷をもみけす

出炭がふえ出したとたんに負傷はふえている。ところがある第二組合員が、勤務中電気の感電事故をおこし、手にやけどをした。ところが係長、係員が〝家でやけどしたことにしてくれ〟と、公傷をもみ消そうとした。

ところが保安常会でそのことを追及されあやまった。しかしこのことは抵抗しなければ、いつでも会社は責任のがれをすることを示している。また保安常会で、保安上の問題でなく〝社是〟のスライドを見せるなど、思想攻撃もみのがせない。

また切り崩しのために、現場係員を、本社研修課のくろだいや原稿集めと称して、組合員宅をまわらせている。現場では一般組合員には低姿勢、活動家には大衆からうき上がらせるように挑発をかけ組織的行動をさせないようにしている。

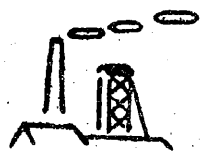
勤休処分

賃金面では、三池労組切り崩しのため、基準法、賃金協定を無視して、デタラメな支払いや、賃金カットをしている。

また出勤対策に躍起となり、世話方は出勤督励にまわっている。毎月出勤不良者は勤休処分（解雇、出勤停止など）を出し、病人にも出勤強制をやっている。それに炭鉱マンの若がえりをねらって人員計画を上まわっても若い人を新規採用し、直接夫から身体の弱い人、年よりをハネ出し、青年層を入れつつある。

会社は二万トン出炭体制を確立するため、三池労組の抵抗を弱めることに必死となり、権力に服従しない者はこうなるのだという、徹底したみせしめをしている。出炭体制を安定維持するため、合理化を思い通りすすめることがねらいであり、職場での組合活動をたたきつぶそうとしている。

三池労組は〝スミを出すために文句を言わせない〟職場での人権無視、生命無視の会社の合理化に対決する。



組合不在をねらう

作本さんの不当解雇

宮浦仕繰工、作本洋三さん（三池労組員）は、二月二六日〝業務阻害〟の理由で、一方的な不当解雇の通告をうけた。

返事しないと解雇か

昭和四〇年一月一三日、繰込みをするのに係員が名前をよんで返事をさせようとした。

就労後五年間、繰込みは、返事をさせる方法でまちがったこともあるので、本人が繰込み札を確認し、係員は本人と札を確認するやり方できていた。

それで作本さんは、〝なぜ返事をさせるやり方になったか、明らかにしてくれ〟と追及したところ係員は問答無用の挑発的態度で作本さんを繰込まなかったため紛争となり、作本さんはじめ三池労組員は係員の不当なやり方に対し抗議して、入坑した。ところが会社側は、繰込まなかった作本さんの入坑を、業務阻害として一方的に解雇通告をしてきたものである。

徹底したみせしめ

われら五人組

（5）

先山も後向も労働者

仕事の前にまず話し合い

負傷ゼロ運動

宮浦支部五〇卸仕繰の通松地域五人組を訪ね、増山組長はじめ五名の皆さんに話し合ってもらった。議題は「負傷ゼロ運動」について。

ケガはいつおきる？

――負傷ゼロ運動が執行部から提案されて、ケガがいつ、どんな状態のとき一番おこりやすいかということをみんなで話し合ったところ、仕事はじめと、仕事終りの直前が一番多いことがわかった。

原因は、仕事はじめのときは、まだ慣れていないから、仕事終りの直前は仕事の片が一応つくまでやってしまおうという気持から、ついバタバタなって保安に対する心がけを忘れやすいということになった。

――仕事に片をつけるということは、先山が会社に対する責任を感じて、なんとか時間までにやってしまおうとすることではないか

――いままでは先山は責任感で仕事をするということが多かった

先山とは話しにくい？

――先山が責任感でバタバタするということは、やはり会社側に思想的にまきこまれているからではないか。やはり仕事をするにもいままでのように先山が一方的に後向きに指示するのではなく、後向きといっしょに仕事をやめて、見張りで着がえる時間や体を洗う時間、それから昇りの人車に間に合うような時間をみつもって、その日の仕事量や終りの時間を話し合うようにすべきだということになった。

――私の場合は、先山に不満はあったが、やはり仕事の経験のちがいから劣等感があって、なかなか話せなかった。

――同じ五人組の中でも「これを言ったら感情的になるだろう」とか「こういったらあの人はどう思うだろうか」などという遠慮があって、先山と後向きの話し合いもなかなかうまくいかなかった。

個人批判は組会議の中だけで

――先山や後向きといっても、労働者という見方からすれば同じ人間だということになり、組会議の中だけは、どんなにいいにくいことでもボスボスいおうということになった。

――決めてもなかなか守られなかったが、組長の指導や話し合いを重ねるうちに「あんたがこういう態度をとってくれるなら、おれもこうする」というような話し合いが少しずつできるようになった。

――カゲで個人批判するならミゾが残っていくので、組会議以外では絶対に個人批判をしないこと。また、組会議でいわれた人は感情的にならんようにしよう。これがむつかしい人も、組長が仇きかけながら前進することにした。

――先山、後向きといっても、同じ労働者なのだから腹を割って話せば、必ず理解しあえる。

後向きの責任も

――後向きにも責任がある。不満を感じながらはっきりいいもせず、しかも個人批判ばかりしていた向きもあった。

――係員の指示も先山だけが聞き、後向きもともに聞こうという姿勢がなかったし、先山が抗議するときも後向きも一口ずついうぞという姿勢がなかった。

――「先山はするだけさせとけ」ということではいかん。

三項目の意志統一

――組会議を本当に全員のものにするため、つぎの三項目を意志統一した。これを守っていくことが真の負傷ゼロ運動だ。

一、会議の時間を厳守する。

二、思ったことは発言する。

三、個人批判は組会議で出す。しかし外には出さない。

私の書棚

あの人の生きたように

グエン・バン・チョイの妻の記録

四山　藤田美代子

ベトナム人民は三つのはげしい民族解放斗争を生きぬいてきた。

第一に、一九四五年までのフランス帝国主義下の独立斗争。第二は、一九四五年八月革命によるベトナム民主共和国の建国以後、再び侵略してきたフランス帝国主義と日本軍国主義に対する抵抗戦争の八年。第三は、現在につづくアメリカ帝国主義の侵略に対する抗米救国斗争です。

若き電気工チョイは、第一の時期に幼年期をすごし、第二の抗仏戦争下で少年期をおくり、現在の抗米救国斗争において勇敢に斗いコンリー橋事件でつかまった時は妻クエンと結婚して数週間しかたっていませんでした。短い面会時間にかわす夫婦の会話には、こまやかな愛情があふれています。その中で彼が妻にくりかえし言っていることは、敵は誰か、どうして斗わねばならないか、そのためには何をなすべきか、常に妻として同志として行動してほしい、ということです。

そして彼を、一九六四年一〇月一五日、サイゴンのカイライ政権は、アメリカの命をうけて銃殺したのです。

しかし、そのことによって何も理解していなかった妻クエンをすばらしい活動家にし、全ベトナム人民をふるいたたせたのです。

ベトナム外交出版社編
松井博光訳
新日本出版社
二四〇円